

有 精 堂 選 書 30

白 樺 派 作 家 論

神戸大学助教授

西 垣 勤 著



有 精 堂

有精堂選書 30

論作家派樺白

著者略歴

昭和一〇年大阪市に生まれる。三三
年東京教育大学文学部国文学専攻を
卒業。三九年東京大学大学院博士課
程を修了。現在神戸大学教育学部助
教授。

《著書》『有島武郎論』(改訂版)

『大正文学—シンポジウム「日本文
学」17』(共著)

《論文》『「こころ」覚え書』(昭四
六・九『日本文学』)『「読美人草」

論』(昭四九・五『日本文学』)『「行
人」』(昭五二・一『別冊国文学』

No.5)『「アポロンの島」』(昭五
五・六『国文学』)その他。

《住所》〒565 大阪府吹田市新芦屋上
27番F211

昭和五十六年四月一日初版発行

定価 二八〇〇 円

著者

西

垣

勤

発行者

山

崎

誠

発行所 有精堂出版株式会社

東京都千代田区神田神保町一の三九

振替口座 東京九一四〇六八四番

郵便番号 一〇一

◇乱丁・落丁本はおとりかえいたします。

目次

I 白樺派の輪郭

白樺派の輪郭……………	二
-------------	---

II 志賀直哉

志賀直哉の初期未定稿論……………	三
志賀直哉の初期文体形成についての一考察……………	四
『暗夜行路』の成立……………	五
志賀直哉……………	六
『暗夜行路』の直子……………	二二

志賀直哉と芥川龍之介	二五
------------------	----

——「私」あるいは「覚悟」についての序——

Ⅲ 有島武郎

『或る女』論	二六
--------------	----

『或る女のグリンプス』と『或る女』	二四
-------------------------	----

——蒲生芳郎氏の批判によせて——

『或る女』のリアリズム	二〇
-------------------	----

「運命の訴へ」『星座』ノート	二三
----------------------	----

「宣言一つ」の位置	一五
-----------------	----

有島武郎の初期ノート	一七
------------------	----

Ⅳ 白樺派とその周辺

「友情」	二三
------------	----

『多情仏心』のおもん 二六

廣津和郎の初期 二〇

——その青春のイメージ——

大正の文学者たち 二七

——『葛西善蔵と廣津和郎』によせて——

あとがき 二八

I

白樺派の輪郭

白樺派の輪郭

I 白樺派の成立

雑誌『白樺』は、明治四十三年（一九一〇）四月に創刊されているが、文壇の注目を集めるのは、大正二、三年（一九一三、四）以降になる。しかし、この創刊の時期に白

樺派の年長の同人たち、武者小路実篤・志賀直哉・有島武郎・有島生馬・木下利玄らは、すでに習作

の時期は過ぎ、本格的な文学活動に入っている。年齢も数え年では、有島武郎は三十三歳、これは例

外としても、武者小路二十六歳、志賀二十八歳、有島生馬二十九歳、木下二十五歳であり、同世代の

文学者が多くすでに文壇で活躍している世代であった。彼らは、明治三十年代後半から四十年代初めにかけて、キリスト教・トルストイズム・社会主義の洗礼を受け、苦悩の末にそこから脱出し、四十

三年前後に作家としての本格的な仕事を始めている。つまり自然主義文学運動の昂揚期に文学活動を始めているのだが、それを否定的に継承したとか、意識的にアンチ・テーゼとして自己の文学を打ち出したとかいうことではない。少し世代がずれながらも、彼らは自然主義と雁行するように作家活動

を始めたと言ふべきで、時間的には自然主義に続いて登場するが、文学史的展開の質的関連はあまりなかった。

しかし白樺派が、自然主義とは際立って異なる文学内容を、自然主義文学運動の停滞のなかでそれと交代するかのように展開したことは確かである。彼らは、世代的にも、階級的にも、自然主義作家とははつきりした異質性を持っていた。つまり、約十年弱の世代の差、地方出身に対する東京出身、そして中流以下の出自ないしは育ち方をしたことに對して、上流・特権階級を出自としたことの差である。とりわけ、最後の差・特徴が、白樺派をこの時期に文学史上に押し出した歴史的社会的要因であった。日本の近代の史的展開のなかで、特権階級・ブルジョアジーの階級が形成・確定され、その「家庭」に生い育ったはじめての世代が、文学者として登場したのである。

史上最大最長の同人雑誌とされる『白樺』は、数年前から文学修業の場としてきた三つの回覧雑誌、すなわち武者小路実篤・志賀直哉・木下利玄らの『望野』、三歳ほど年少の里見弴・園池公致・児島喜久雄らの『麦』、さらに一、二歳年少の柳宗悦・郡虎彦の『桃園』が合同し、それに有島武郎・生馬の兄弟が加わって創刊された。ひきつづき長与善郎・小泉鉄・岸田劉生・千家元麿らが加わり、さらに遅れて、近藤経一・大養健・倉田百三・尾崎喜八らが参加している。また高村光太郎・九里四郎・山脇信徳・梅原龍三郎・バーナード・リーチ・富本憲吉・木村莊八・中川一政らが画家として協力している。

上流階級の子弟たち、これら同人のうち最初の同人は全員、後続の同人の多くも学習院の出身である。華族とブルジョアの子弟で、そして彼らの父親たちは、仮に明治維新

の志士たちの生き残りを明治インサイダーの第一世代だとすれば、それ以後の天皇制を中心とする明治絶体主義体制、日本的独占資本主義の形成発展を担った第二世代であり、たとえば、『白樺』創刊のその年に、一方で朝鮮併合を強行し、他方社会主義者数百名を天皇暗殺を企図したとして検挙し、秘密裁判で二十四名の死刑を判決し、日ならずして幸徳秋水（明4~44）以下十二名の死刑を執行する（大逆事件、明43）という内外の帝国主義政策をとる体制に、直接間接にかかわるインサイダーであった。

そのインサイダーの子弟たちの彼らは、とりわけ年長世代の武者小路実篤・志賀直哉・有島武郎らは、青年期に至って、自分たちの階級の特権性を激しく否定する思想、つまり、キリスト教・トルストイズム・社会主義に出会い、その出自と思想の矛盾に苦しむのである。

たとえば、武者小路実篤（明18~昭51）は、トルストイと出会い、「トルストイによつて自分の生活を否定し出し」て「現代の社会組織のまちがつてゐる」という「危険思想」（『或る男』）に至り、天皇制批判の言辞を吐き、革命・変革のプログラムを夢見、労働者階級への激しい羨望の声をあげている（『日記』明39）。そして、明治四十一年（1908）、トルストイの農本主義的社会主義と男性の敵しい性のモラルの圧倒的影響下に、処女詩文集『荒野』を自費出版している。集中の評論「人間の価値」には、特権階級出身の自己否定に基づくヒューマニズムの主張があり、小説「彼」や「二日」には田園

生活への憧憬と、『復活』のモラルの讃仰が、若々しく謳いあげられている。ここには武者小路の青春がまぎれもなく刻印されているのである。

その他、志賀直哉（明16→昭46）は、明治三十三年から四十一年まで内村鑑三（万延2→昭5）の門下であり、三十四年には、足尾銅山鉍毒問題で、現地に見にいこうとし、また四十年には、自家の女中と結婚しようとして父と激しく衝突している。その父との不和・対立は、キリスト者、あるいはトルストイズムの立場からの、資本の側、体制側に立つ父との激突であったと言えるのである。世代は違うが、有島武郎（明11→大12）は、明治三十二年、キリスト教に入信、そして三十八年、キリスト教を棄て社会主義とホイットマンのローファーの思想に移るのであるが、それも、特権階級出身者としての彼の、社会矛盾を凝視しつづけたことからくる思想的模索であったのである。

ついでに言えは、白樺派の多くに共通する女中との恋愛・結婚問題も、トルストイズム、とりわけ『復活』のモラルと青年の欲望との葛藤から生まれたものである。そのなかで千家元麿（明21→昭23）はただ一人『復活』のモラルを貫いた人であった。彼は自家の女中であった人と結婚し、「家」からの庇護を断ち切り、その「家庭」への愛、母子への愛を謳いあげて詩人として出発している。反対に最も軽く通りすぎたのはトルストイズムを棄てた後の武者小路であった。この経験を実生活だけで処理せず、文学の問題としたのは志賀直哉と里見弴であった。志賀直哉には「大津順吉」（大元）と「過去」（大15）がある。しかし「大津順吉」は、結婚の決意と父の反対のところで中絶し、「過去」は過去の失敗談として書かれ、十分それを文学的に表現しきれなかった。里見は、これらのなかにあっ

て、女中との愛なき関係と「復活」のモラルとの葛藤の苦しみをストレートに追求した「君と私と」(大2)を書き進め、この問題を最も文学的に定着せしめ、また彼自身の文学のかけがえのない出発点としたのである。この問題も、キリスト教・トルストイズムにかかわる彼らの青春の一断面であった。

『白樺』の創刊、そして、しかし、彼ら、とりわけその思想的リーダーであった武者小路は、『白樺』創刊のエゴイズムの出発

刊前後の明治四十二、三年(西暦一九〇九)には、トルストイズムを棄て、ひたすら自己の成長をめざす強靱な自我意識を固めることで文学の出版を果たそうとしていた。それは、思想の順当な発展というよりは、ある思想からのやむにやまれぬ脱出、あるいは転向というよりほかにいものであったが、しかしそれは、また彼らの深刻な苦悩の末、自己の存在基盤とそこから生まれてくる実感とがいかに切りはなしがたく結びついているかということ、そして彼らのめざす文学というもの、どう言おうと自らの実感を生かすしかないものだということをリアルに見据えたいという決断ではあったのである。いうまでもなくその思想路線は、結局父の世代のかちえた特権的な社会的、経済的基盤にのっとりながら、その反映である自己の思想・実感を、人間性一般の自然なそれだとして押し切ることにはかならなかった。つまり彼らは、階級的現実を目をつぶり、まず自己の自由な伸長をめざすエゴイズムによって自己を定立しようとしたのである。この絶対的自我肯定とそれによる成長意識は、思想的にはメーテルランクの『知慧と運命』に拠るところが大きかったといわれる。たとえば武者小路は、「自己の如く隣人を愛すると云ったって第一自己を愛することを知らなければ始

まらない」といった言葉に啓示を得（武者小路『自己の爲』及び其他について「明45」、いわゆるトルストイからメーテルランクへの転回をなすのだが、それと同時に、彼らが日本的現実をひとまず無視し、世界的な広がりを目を向け、「人類」という言葉を実感できたことには、もう一つ、西洋絵画への傾倒によるところが大きかったのである。

『白樺』は文学雑誌であると同様な比重で美術雑誌であったと言えるので、近代美術史上にも大きな意義を担っている。明治四十三年十一月のロダン直筆の手紙を載せた「ロダン号」はとくに有名だが、その他、ゴッホ・マティス・セザンヌ・レムブラント等々の多くの特集を行うばかりか、毎号載せたそれぞれの画家や絵について本格的な論文や紹介を書いているのである。同人と先述した画家たちとの交流、協力のなかでの、西洋近代美術への傾倒、とりわけ、既成の權威を否定して、自らの主体の權威を伸長しようとした後期印象派の絵、そしてその劇的な人生への共鳴は、彼らの自我至上主義を大きく支えたといえるのである。

『白樺』は大正十二年（一九二二）八月終刊まで、足かけ十六年、全一六〇冊に及ぶ月刊誌であったが、四十三年から大正三、四年までを初期と考えることができる。

武者小路の初期

トルストイ主義から脱出した武者小路は、明治四十四年（一九二二）、『お目出度き人』を刊行した。この小説の主人公「自分」は、学習院を出た二十六歳の青年で、顔はよく見るが話をしたことのない鶴という女性に惹かれる。再三にわたって人を介して結婚を申し込むが断られる。自分は鶴となら個性を曲げずに理想的に愛し合えると信じ、思ひは募るばかりにな

る。偶然乗り合わせた電車のなかでの鶴の態度から彼女の愛を確信し、幸福感に浸るが、やがて鶴が結婚したことがわかり、彼の心は打ち砕かれる。しかし彼は、鶴が自分を恋しながらやむをえず結婚したのだと理由もなく確信するというのである。

この作品は、話をしたこともない女性を理想的な女性と一方的に「確信」し、五年間恋しつづけ、完全な片思いに終わっても自分を恋していたはずだと「確信」するという、決して挫折しない自我の強さと純粹さを謳いあげたものだが、この小説の後ろにある武者小路の日記たかなる女性への片思いは、三十九年から四十五年の七年に及んでおり（この小説発表の後も続く）、この小説は単なるお目出度き人のお話ではなかったのである。

つづく『世間知らず』（大元）は、一転して、二度目の出会いで肉体交渉を持ち、それ以後二人の精神的恋愛が始まり、そして結婚するという当時としては破天荒な筋書きの小説であった。これも最初の夫人竹尾房子との結婚の事実報告としての小説であり、徹底した自我の確信とそれによる実行があり、それは結果として、男女関係、とりわけ女性についての当時の人良識をばじきとばしている感がある。

武者小路は、このほか、幸・不幸は相対的なものであり、人間を根本から救済する「人類の意思」を信じて、「現在の情にうごかされ」ることを拒否するモチーフの戯曲「わしも知らない」（大3）、あるいは『白樺』に毎号書き続けた無類の個性的文体の「六号雑感」などで、まさに天馬空を行くがごとき強烈な自己主張を行うのである。彼のこの時期の文体は、芥川龍之介をして「文壇の天窓を明け

放つて、爽かな空気を入れ、新しい文学が始まったと言わしめたように、今日まで続く口語文体の幕開けでもあった。

志賀直哉の出生

志賀直哉は、明治四十一年（丙午）、内村鑑三の門を去っている。その原因は、聖書の倫理と青春の欲望の矛盾にあり、彼は、その倫理から脱出し、しかしその矛盾を文学のテーマとするというふうに動いていくが、内村鑑三から彼が学んだ激しい好悪感・正義感は、志賀の文学的骨格を形づくったと言えるのである。

この、好悪・善悪とする強い自我意識は、言うまでもなく、志賀自身の実生活において激しい矛盾をひきおこさざるをえない。不正義を憎むとすれば、社会の不正義が明々白々と迫ってくる日本の前近代的現実に反発、対立をせざるをえないし、他方、自己の実感を全肯定する強烈なエゴイズムは、それがブルジョアジーの子弟としての階級性を反映している以上、社会の不正義との全面的な対立に進むことに歯止めをかけ、できるだけ狭い範囲に反発・対立を押しとどめようとするからである。この矛盾のはざまにあって、激しく緊張し、その緊張を強固な文体に定着しようとしたところに彼の文学のすぐれた独自性が生み出されたのである。

明治四十一年執筆の「或る朝」（大7）と「網走まで」（明43）は、その矛盾と緊張による文学を二つの面から示している。

「或る朝」は、祖父の三回忌の日に朝寝坊がもとで起きた祖母とのいさかいと和解を描いた片々たる小品だが、ここに示された「反発・葛藤・和解・調和」（赤木俊二・荒正人「私小説作家としての志賀直

哉』『志賀直哉研究』のパターンは、志賀の小説の多くに共通のもので、彼の代表作「和解」(大6)にも『暗夜行路』(大10・昭和12)にも事柄を複雑にしながら貫かれており、志賀の文体の確立を示す作品であった。

しかしこのパターンは、作者Ⅱ主人公の実感でもって完全に作品を貫こうとするものであり、したがって、主人公以外の、他者・社会をどれだけ内包しうるかにその文学の成否がかかるわけであるが、志賀は、この他者・社会と自我・実感の葛藤・緊張を以後文学として表現していくのであり、「網走まで」はその出発点をなす作品であった。

これは、作者と思われる主人公が、宇都宮まで行く車中で、網走まで行くという不幸そうな母と子にできるだけの親切を尽くす話である。その人間交流は同車した隣人への親切以上に出るものではないが、他人の不幸への注視と深い同情とがうかがえ、「隣人としての即発的な愛と清潔な節度がたゆとう」「平等な」人間関係(紅野敏郎『現代日本文学講座』4解説)が定着しているとみえるのである。この系列は、「正義派」(大元)、「十一月三日午後の事」(大8)、「小僧の神様」(大9)、「灰色の月」(昭和21)というように続くのだが、それらの作が示すように、その他者への同情・ヒューマニズムがしだいに退行していきながらも、志賀文学の重要な流れとなるのである。

この強烈な自我と他者・社会への同情との矛盾・葛藤の軸は、父直温との不和・対立にあった。志賀の父との対立は、先に触れた、足尾銅山鉱毒事件をめぐる、女中との結婚問題があり、それに大正三年(二五四)の康子^{さだ}夫人との結婚強行とがあるのであるが、前二者は彼がまだ作家としての自己

確立を果たす以前の時期である。

「大津順吉」のリアリズム

その対立を彼が作品化したものには、文壇での出世作となった「大津順吉」（大元）と、その「同木異枝」とされる「和解」（大6）「或る男、其姉の死」（大9）「過去」（大15）「山形」（昭2）とあるが、父との大正六年（一九一七）の和解以前では「大津順吉」ただ一作であった。

ということは、志賀が父子の対立をどう表現するかに苦しみ、その渦中では一作しか書けず、この対立が和解した喜びを一気に書き下ろした名作「和解」以後になって、そのいきさつを後日談的に説明するにとどまったことを示しているのである。つまり、志賀は「大津順吉」以外にはこの父子の対立をそのさなかで私小説的に書いて父と闘うことも、あるいはそれを社会化し、虚構化し、本格的なリアリズムの方向に展開することもできなかったのである。父子の対立というテーマでいうならば、ただ一作書かれた「大津順吉」も中絶にはならなかった。

「大津順吉」は、その前半「第一」で、女でありさえすれば誰でもいいという青春の実態と、聖書の倫理でそれは途方もない罪であるという認識のはざまにあって、女性への緊張感を激しく抱く青年を描き、後半の「第二」では、聖書の倫理と、女を求めようとする「猪武者」的意識と、それに父のブルジョア的意識に激しく反発しながらまた女中である女性に対しては愛してはいても捨て切れぬ旦那意識と、その三者の相克する自己の内部を凝視した作品であった。これと似た自己検討の小説としては「濁った頭」（明44）、「児を盗む話」（大3）を挙げることができよう。